「文化船ひまわり」の歴史に触れる体験会 参加記

佐藤裕亮

1960年代から80年代にかけて，広島県立図書館が運用してきた図書館船「文化船ひまわり」建造の地である江田島で，「『文化船ひまわり』の歴史に触れる体験会」が2019年１月26日に江田島・能美図書館，広島・地域から「体験の風をおこそう」運動推進実行委員会の主催により開催された。会場は江田島市鷲部公民館（江田島図書館隣接）。１階エントランスと２階会議室には文化船ひまわりの建造風景や，出航・寄港時の様子を伝える写真が掲示され，写真に映る時代や景観を知る人や，利用経験のある参加者からは，往時を懐かしむ声も聞かれた。開会時刻の１時30分には，大人から子どもたちまで幅広い年齢層の参加者で会場はほぼ満席となった。

開会の挨拶ののち，広島県立図書館副館長・植田佳宏氏の講演「映像で伝える文化船ひまわりの歴史」があり，図書館船が世界的にみても希少な存在であることや，「文化船ひまわり」の名称の由来，1961年の進水式から1981年７月の退船式，瀬戸田町への船体の引き渡しにいたる沿革，船体の保存状況，近年の文化船ひまわりBB（ブックボート）プロジェクトによる取り組みなどが，写真を交えながら紹介された。

文化船ひまわりは約20年ものあいだ，県内の島々を巡航して，陸地部を走る「みのり号」とともに図書館資料を提供し，地域の生活文化の向上に寄与してきた。講演では，みのり号やひまわり号の活動の様子を伝える映像『「みのり号」の軌跡：移動図書館車の歴史』（1962～1963年頃に撮影）を投影し，広島県立図書館「移動図書館閲覧券」（復刻）を配布するなど，歴史を立体的にとらえ，身近に感じるための工夫が凝らされ，多くの聴衆を惹きつけていた。

会の後半は，文化船ひまわりBBプロジェクトの皆さんによるワークショップ「ひまわり号のペーパークラフトを作ろう」が行われ，代表の藤田玲生氏による挨拶ののち，児童文学作家の林原玉枝氏らによる作り方の説明があり，助力を得ながらペーパークラフトの作成に取り組んだ。参加者の真剣なまなざしと，うれしそうな子どもたちの笑顔が印象に残る体験会であった。

BBプロジェクトは，文化船ひまわりの解体が尾道市議会で決定された2015年，瀬戸田町の住民有志による保存活動が契機となり2017年11月に設立された団体で，文化船ひまわりの保存と周知を目的とし，絵はがきやペーパークラフトの作成，小学校等での講演会や絵本の読み聞かせなどを行っており，SNS等を活用して情報を発信している。

体験会の翌日，筆者をふくむ数名は，植田氏にご案内いただき尾道市瀬戸田町（生口島）のB&G財団瀬戸田海洋センターに保存されている文化船ひまわりのもとへと向かい，植田氏や地元で保存に尽力しておられる永井晃氏のお話を伺いながら，船内を見学した。

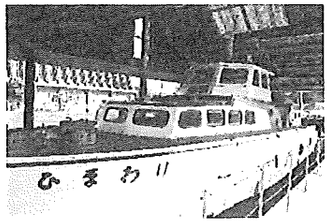

写真１．文化船ひまわり

現在，ひまわり号の船体が保存されている生口島は，かつては塩業で栄えたが，現在はレモンの栽培で全国的に有名な町である。1999年に西瀬戸自動車道（しまなみ海道）が開通し，2006年にはいわゆる平成の大合併により旧瀬戸田町は尾道市に編入され，人びとの往来にも変化が生まれているという。

展示場所には屋根が設置されているとはいえ，船体の劣化は進んでいる。もっとも，2015年以降有志により続けられた保存活動の結果，窓ガラス破損箇所の修復や再塗装等がなされており，その外見は往時の姿を彷彿とさせるに十分なものがあった。

操舵輪左側の階段は，中央部にシートと机，書架の並んだ空間「サロン」に続いている。棚板には若干の傾斜がつけられており，加えてブックエンドでしっかりと押さえることで，航行中の揺れにより本が落下するのをふせいでいたという。船内は狭く，各島の停泊時間には限りがあるため，利用者がサロンでゆっくり書物を選び本を読むのは難しかったと思われるが，中央部の机に伸縮式のものを採用するなど，空間を有効につかう工夫が見てとれた。

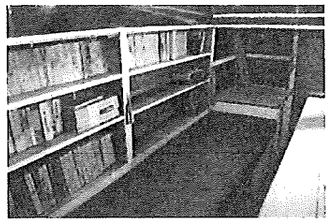

写真２．船内（サロン）の様子

機関室はサロンに隣接して配置されているが，すでにエンジンなどは取り外されている。また，船の後方には船員のための船室があり，ベッドや机，流し台，氷式冷蔵庫などが配されており，当時の船員生活の様子をうかがうことができた。

文化船ひまわりは，図書館文化史にとって欠くことのできない存在であると同時に，地域の記憶をつなぐ歴史的遺産でもある。ひまわりの航跡と，その時代の本や図書館をめぐる人びとの営みを，地域の記憶として共有し，将来に引き継いでいくためにはどうしたらよいか。そのような模索のなかから生まれたひとつの回答が，江田島での体験会だったのではないか，と感じている。

なお，展示場所には以前より解説板が設置されているが，経年による字の摩耗や退色が認められる。これまで文化船ひまわりが，どのように解説されてきたのかを示す記録として，稿末にその内容を記しておく。

参考文献
・植田佳宏「文化船『ひまわり』って知っていますか？：文化船の航跡を後世に」『図書館雑誌』112(4)，2018.4，pp.258-259.
・広島県立図書館『航跡：文化船ひまわり引退記念誌』広島県立図書館，1982，48p.
・広島県立図書館［回答］「広島県立図書館が運行していた移動図書館船ひまわり号について知りたい」レファレンス協同データベース，国立国会図書館，2016.8，http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000182532
・藤田玲生「文化船ひまわり号を残す：平和を愛し，文化に親しむ人間を育むために」『としょかん』146，2018.8，pp.14-15.
・日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み』地方篇，日本図書館協会，1992，pp.612-613.
・日本図書館協会編「図書館界ニュース：『文化船ひまわり』の『体験会』開催される」『JLAメールマガジン』932，2019.2

（さとう　ゆうすけ：東京都在住会員）

［NDC 10：015.5
BSH：1. 文化船ひまわり
2. 図書館（公共）－広島県］

元県立図書館　文化船「ひまわり」（全国唯一の図書館船）

この船は，広島県立図書館が昭和29年に移動図書館活動の一環として島嶼（しょ）部の人たちに読書に親しんでもらうため，昭和37年４月から文化船「ひまわり」として就航していた図書館船です。長い航海による船体の老朽化と道路交通網の発達により，昭和56年７月から業務を図書館車「みのり号」にゆずりました。その間，1500冊の図書や映画のフィルムなどを積み，年８回瀬戸の15の島々を巡り，24の市町を訪れ，特に小学校児童を中心に多くの人々に親しまれ，図書館活動に大きな役割を果しました。

瀬戸田町には，当初より寄港し，児童・生徒・婦人など，多くの人たちに愛された全国唯一の図書館船です。

この施設は昭和56年11月25日に広島県より寄贈を受けた文化船「ひまわり」を永遠に保存し，文化教育資料として活用するために建設したものです。

◎船舶表示

・建造年月日	昭和36年12月15日（江田島造船所）
・総トン数	19.75トン （純トン数7.61トン　排水量11.16トン）
・構造	木造
・主機・出力	ディゼル・180馬力
・最大速度	19ノット
・形態	全長14.00m，巾3.65m，深さ1.76m 高さ5.60m　平均吃水0.56m

◎稼働状況

・就役	昭和37年４月１日
・終了	昭和56年７月31日
・航行距離	89,477Km（地球を２周半）
・延利用者数	587,318人
・貸出冊数	365,825冊

瀬戸田町教育委員会＊B&G財団瀬戸田海洋センター